自己表現に及ぶ個人要因と状況要因による影響 ——自己表現における行動形態についての選好比較——

安藤有美

Influence of Self-expression by Personality Factor and Situation Factor :
Comparison of the behavioral patterns in Self-expression

Yumi ANDO

ABSTRACT

This research considered the influence of personality factors and a situation factor about self-expression when college students are performing in a dialog scene. Self-expression consists of the following behavioral patterns assertive, aggressive, unassertive, indirect, and simplistic. The response for each imaginary situation was made into a preference of self-expression.

The questionnaire was completed by 631 college students. Analysis of variance revealed the following : (a) The preference of self-expression changes according to the situation factor. (b) The preference of self-expression changes according to the personality factor. (c) The preference of self-expression is expressed in response to the interaction of a personality factor and a situation factor. All these things made it clear that self-expression differs according to personality factor, although self-expression is subject to strong influence by the situation factor.

KEYWORDS : self-expression, assertiveness, aggressiveness, personality factor, situation factor, college student

問題と目的

自己表現や自己主張に関しては、アサーションという概念を用いて多くの研究がなされている。我が国におけるアサーションは「自分も他者も大切にしたい自己表現」が一般的となっているが、アサーションの定義については、研究者や実践家により多様な考え方が存在している。その1つに、自己表現の表出方法としての行動形態に着目したものがある。

Alberti & Emmons (2001)¹⁾は、行動形態についてアサーティブ、アグレッシブ、ノンアサーティブという3種類で捉えている。アサーティブとは、「自分が自分のために行動し、感情を無理なく正直に表現する行動」である。アグレッシブとは、「他者に代わって強引に選択したり、他者を犠牲にすることによって、自分の目的を達成しようとする行動」である。ノンアサーティブとは、「自分の感情を抑制し、他者の選択を優先させる行動」である。また、Phelps & Austin (1981)²⁾はアサーティブとノンア

サーティブに加え、直接的・間接的なアグレッシブをそれぞれ1つの行動形態と捉えている。

自己表現を行動形態の観点で捉える利点は、アサーティブとアグレッシブの区別のつきにくさ^{6),14)}を事前に弁別することができる。区別のつきにくさについて、例えば、攻撃的なセールスマンによる自己表現は他者尊重を欠いたものであっても、目標達成のための自己表現としてはアサーティブとされたり⁶⁾、女性のアサーティブな自己表現が時としてアグレッシブと捉えられる⁵⁾など、行動それ自体でなく、結果としての行動の適切さが判断の基準として優先される場合がある。これは社会的文脈や社会的立場によっても判断が異なり、明確な基準ははまだ確立されていないのが現状である。アサーション概念を理解するにあたり、行動形態という行動そのものに焦点をあてることは、表出された行動を客観的に特定することを可能にする。さらに、行動形態に関連する個人要因や状況要因による影響を検討することで、自己表現に関わる個人差や状況といった規

定因の探求につながり、アサーション概念の明確化に資すると考えられる。

自己表現に関わる個人要因として、自尊心や人気⁸⁾、性役割観²²⁾、攻撃性^{9)-10), 12)-13)}が取り上げられ、個々の行動形態との関連が明らかにされている。こうした個人要因に加え、状況要因による影響を考慮したものとして、塩見・庄田(2004)²⁹⁾がある。塩見・庄田(2004)は“権利の防衛”場面(列に並んでいるところを割り込まれるという場面)と“異なる意見の表明”場面(同じ係になろうと誘われたが、違う係をしたいという場面)を設定した検討を行っている。そして、場面への反応として得られた自由記述から主張的行動、攻撃的行動、服従的行動の行動形態を抽出し、主張性、状態不安・特性不安といった個人要因との関連を場面ごとに確認している。これと同様に、安藤(2009)⁴⁾は大学生を対象に30の場面提示により行動形態を抽出している。抽出された行動形態は、先行研究^{1), 7), 20), 26)}で示された4つの行動形態(「アサーティブ」、「攻撃的」、「非主張的」、「間接的」)に加え、他者感情に与える影響を顧みず、感情のままに表出される「短絡的」が確認されている。本研究では、先行研究の知見を踏まえた5つの行動形態について、表出に影響すると考えられる個人要因と状況要因との関連を検討することを目的とする。

まず、個人要因として取り上げる要因は、行動形態との関連が予測される攻撃性、対人不安、公的自意識、共感性を用いる。これらを用いることで、全ての行動形態がいずれかの個人要因と関連することを想定している。これについて以下に示す。

(1) 攻撃性 攻撃性と「アサーティブ」、「攻撃的」、「非主張的」との関連が確認されている^{9), 12)-13)}。特に「アサーティブ」と「攻撃的」は、相反する行動形態でありながら、どちらも攻撃性を有することが示されている¹³⁾。これにより、攻撃性の高い者は「アサーティブ」、「攻撃的」の選好が高く、「非主張的」の選好が低くなると予測される。また、「短絡的」は「攻撃的」の下位概念である可能性が示唆されており(安藤, 2009)⁴⁾、同様に攻撃性との関連が予測される。

(2) 対人不安 対人不安と「非主張的」との関連が確認されており^{2), 16), 24)-25)}、対人不安の高い者は「非主張的」の選好が高くなることが予測される。

(3) 公的自意識 公的自意識と「アサーティブ」との関連が確認されており³²⁾、公的自意識の高い者は「アサーティブ」の選好が低くなることが予測される。また、直接的でない表現方法である「間接的」は他者や状況を意識したものと考えられ、公的自意識との関連が予測される。

(4) 共感性 共感性に関わるとされる“暖かさ”、“好ましさ”、“思いやり”、“温厚さ”と「アサーティブ」との関連が確認されている²¹⁾。これにより、共感性の高い者は、「アサーティブ」の選好が高くなると予測される。

次に、自己表現に関わる状況要因としては、これまでも多くの研究者が関連する要因を取り上げ、自己表現における場面依存性の高さに触れている^{4), 15), 33)-34)}。この中で、状況要因が自己表現の規定因となることを実証的に示したのものとして、Eisler, Hersen, Miller & Blanchard(1975)¹¹⁾の研究がある。Eisler et al.(1975)は、ポジティブ場面(賞賛や好意などのポジティブな感情が生起されやすい場面)とネガティブ場面(怒りや不満などのネガティブな感情が生起されやすい場面)の32場面を用い、被験者の実際の自己表現を記録し評定を行っている。その結果、場面によって表現内容が異なり、ポジティブ場面ではポジティブな感情が表出されやすく、ネガティブ場面ではネガティブな感情が表出されやすいことが確認されている。また、高井(2002)³¹⁾も、対人的コミュニケーション方略と場面との関連を検討し、場面によって表現される方略が異なることを明らかにしている。

以上より、自己表現は個人要因と状況要因という両要因の影響を受け表出されるものであり、同一場面であれば、個人要因の程度によって自己表現の方法は異なるものと考えられる。本研究は仮想的な対人場面での各行動形態の選好について、個人要因の程度の違いに着目した検討を行う。

方法

1. 調査対象者と実施方法

大学生631名（男子335名，女子296名）で，平均年齢19.6歳（ $SD=1.37$ ）であった。調査は講義時間を使用し「コミュニケーションに関する調査」というテーマで，質問紙調査を行った。調査は無記名式で行われ，得られたデータは統計的に処理されるため，個人の回答が問題になることはなく，個人のプライバシーは保護される旨を説明した。

2. 調査内容

1) 自己表現における行動形態の選好の測定

自己表現における行動形態 はじめに，友人とのコミュニケーション場面を4種類設定し，それぞれの場面別に，5つの行動形態（アサーティブ，攻撃的，非主張的，間接的，短絡的）に相当する具体的な発言内容を文章にて提示した。次に，これらの発言に対して，普段の生活でどの程度用いやすいかを“よく使う（5）”，“時々使う（4）”，“どちらともいえない（3）”，“あまり使わない（2）”，“決して使わない（1）”の5件法で尋ねた。4場面を通じた加算得点を行動形態の選好とし，得点範囲は各行動形態につき4点～20点であった（Appendix）。

コミュニケーション場面の選択 異なる特徴を持つ場面として，安藤（2009）⁴⁾で用いられた場面から選定した。安藤（2009）は，自己表現が必要と考えられる30場面を用いて，各場面がもつ2つの特性（“登場人物への親密度”と“主張の必要性”）の程度について，5段階評定により回答を求め，場面ごとに全対象者の得点の加算平均を算出している。さらに，これを用いて階層的クラスター分析（Ward法）により4クラスターを確認し，特性の異なる4つの場面群を構成している（親密度高／主張の必要性低：[H/L]，親密度高／主張の必要性高：[H/H]，親密度低／主張の必要性低：[L/L]，親密度低／主張の必要性高：[L/H]）。

本研究は“登場人物への親密度”と“主張の必要性”の程度の異なる各場面群からそれぞれ1場面選定した。選定の基準として，安藤（2009）の検討に

より得られた各場面における反応（自由記述データ）の現れ方に着目した。安藤（2009）は，場面ごとに，得られた反応をKJ法により5つの行動形態で分類し，得点化を行っている。場面によっては，1つの行動形態の出現率が極端に高く，他の行動形態がみられない場面もあった。本研究は自己表現の表出に伴う個人差を明らかにするためにも，極力反応が分散される場面を選定する必要がある。そのため，過半数以上の対象者が同一の行動形態を示すなどの偏った傾向がみられる場面は除外し，比較的均等な反応がみられた場面を選定した。特に，ポジティブ場面よりもネガティブ場面で反応が分散されており，個人差がより妥当に引き出されていると考えられたため，心理的に葛藤を抱きやすいネガティブ場面を選定した。

2) 性格特性の測定

以下の尺度項目について，自分自身にどれほどあてはまるのかを“あてはまる（5）”，“ややあてはまる（4）”，“どちらともいえない（3）”，“あまりあてはまらない（2）”，“全くあてはまらない（1）”の5段階評定で回答を求めた。

（1）攻撃性 日本語版 Buss-Perry 攻撃性質問紙³⁾の下位尺度のうち，“短気”と，“敵意”の計12項目（ $\alpha=.79$ ）を使用し，加算したものを“攻撃性”得点とした（得点範囲は12点～60点）。

（2）対人不安 対人恐怖心性尺度^{17)–18)}の下位尺度である“自分や他人が気になる悩み”と“目が気になる悩み”の計10項目（ $\alpha=.83$ ）を使用し，加算したものを“対人不安”得点とした（得点範囲は10点～50点）。

（3）公的自意識 日本語版自意識尺度³⁰⁾の下位尺度である“公的自意識”の計11項目（ $\alpha=.84$ ）を使用し，加算したものを“公的自意識”得点とした（得点範囲は11点～55点）。

（4）共感性 情動的共感性尺度¹⁹⁾の下位尺度である“感情的暖かさ”の計10項目（ $\alpha=.75$ ）を使用し，加算したものを“共感性”得点とした（得点範囲は10点～50点）。

結果と考察

1. 行動形態の選好と状況要因との関係

場面によって各行動形態の選好に違いがみられるか調べるため、行動形態の平均値と標準偏差を算出し、行動形態を独立変数、行動形態の選好についての尺度得点を従属変数とした一要因分散分析を行った (Table 1)。その結果、[H/L] 場面では「非主張的」($F(4, 2524) = 142.06, p < .001$)、[H/H] 場面では「アサーティブ」($F(4, 2520) = 98.07, p < .001$)、[L/L] 場面と [L/H] 場面では「短絡的」が最も多く選好されることが明らかとなった ([L/L]: $F(4, 2524) = 216.44, p < .001$, [L/H]: $F(4, 2516) = 142.06, p < .001$)。これについては、安藤 (2009)⁴⁾でも [H/L] 場面群、[H/H] 場面群、[L/L] 場面群で同様の結果が示されている。これにより、親しい友人であっても、自己表現が必要な場面では「アサーティブ」を用いやすいが、自己表現が必要でない場面では「非主張的」を用いやすいことが明らかとなった。また、親しい間柄でなく、自己表現が必要でない場面では「短絡的」を用いやすいことが確認された。

2. 個人要因と状況要因の相互作用が及ぼす行動形態への影響

個人要因と状況要因との関連から、行動形態の特徴を明らかにするために、各個人要因について、四分位数を基準値として群分けを行い、それぞれの合計得点が第3四分位数以上のものを高群、第1四分位数以下のものを低群とした。そして、個人要因の

高低群ごとに状況要因と行動形態を独立変数、行動形態の選好についての尺度得点を従属変数とした二要因分散分析を行った (Table 2)。その結果、全ての個人要因において、状況要因と行動形態による主効果と交互作用が認められた ($p < .001$)。さらに、場面ごとに単純主効果検定を行った。この結果を踏まえ、個人要因の高低により生じる選好の違いについて、顕著なものを以下に論じる。

1) 攻撃性

攻撃性の高い者 (高群) と低い者 (低群) を抽出したところ、高群では得点が40点~60点の範囲 ($n = 148$, 得点平均値 = 45.36, $SD = 4.09$) で、低群では0点~30点の範囲 ($n = 153$, 得点平均値 = 23.75, $SD = 6.91$) であった。単純主効果検定を行ったところ、高低群における選好の仕方に違いがみられた。

まず、場面ごとに選好されやすい行動形態をみたところ、高群は [H/H] で「アサーティブ」のみを最も選好しやすいとしているのに対し、低群は「アサーティブ」に加え「非主張的」をあげており、両者に違いが生じた。これにより、[H/H] では「アサーティブ」が選好されやすいが、攻撃性が低い場合には「アサーティブ」と同様に有効な手段として「非主張的」が加わることが確認された。

さらに、これまでの研究において、「攻撃的」と攻撃性との関連が明らかにされており、高い攻撃性は攻撃的な自己表現をとりやすく、低い攻撃性は攻撃的な自己表現をとりにくいと考えられていた。しかし、場面を通じた「攻撃的」の選好をみたところ、低群は [H/L] を除く場面で、「攻撃的」を最も選

Table 1. 場面別([H/L]・[H/H]・[L/L]・[L/H])の行動形態の選好の平均値と標準偏差、および分散分析の結果

行動形態	場面 M (SD)				F 値	多重比較 Bonferroni 法 ($p < .05$)
	[H/L]	[H/H]	[L/L]	[L/H]		
アサーティブ	2.84 (1.31)	3.83 (1.13)	2.74 (1.31)	3.33 (1.32)	120.77*	[H/H] > [L/H] > [H/L] = [L/L]
攻撃的	2.66 (1.31)	2.56 (1.38)	2.03 (1.21)	2.21 (1.36)	41.43*	[H/L] = [H/H] > [L/H] > [L/L]
非主張的	4.06 (1.07)	3.50 (1.21)	2.93 (1.26)	2.51 (1.35)	216.51*	[H/L] > [H/H] = [L/H] > [L/L]
間接的	3.14 (1.30)	3.10 (1.40)	2.22 (1.24)	2.54 (1.33)	85.78*	[H/L] = [H/H] > [L/H] > [L/L]
短絡的	2.68 (1.16)	3.04 (1.26)	3.84 (1.20)	3.40 (1.35)	112.58*	[L/L] > [L/H] > [H/H] > [H/L]

* $p < .001$

Table 2. 行動形態の選好についての個人要因と状況要因による影響

個人要因	行動形態	場面別選好の平均値				F 値			単純主効果の検定結果
		(H/L)	(H/H)	(L/L)	(L/H)	場面	行動形態	交互作用	
攻撃性 高群 n=148	アサーティブ	2.81	3.87	2.87	3.34	12.94*	25.85*	25.31*	(H/L) 非主張>間接,アサーティブ,短絡,攻撃
	攻撃的	2.74	2.75	2.39	2.46				(H/H) アサーティブ>間接,非主張,短絡,攻撃
	非主張的	4.04	3.31	2.93	2.69				(L/L) 短絡>非主張,アサーティブ>間接,攻撃
	間接的	3.14	3.28	2.45	2.66				(L/H) 短絡,アサーティブ>非主張,間接,攻撃
	短絡的	2.77	3.07	3.79	3.54				
低群 n=153	アサーティブ	2.77	3.76	2.54	3.22	36.83*	95.07*	41.93*	(H/L) 非主張>間接,アサーティブ,攻撃,短絡
	攻撃的	2.60	2.22	1.61	1.83				(H/H) アサーティブ,非主張>短絡,間接>攻撃
	非主張的	4.11	3.55	2.93	2.21				(L/L) 短絡>非主張>アサーティブ>間接>攻撃
	間接的	3.06	2.76	1.93	2.39				(L/H) 短絡,アサーティブ>間接,非主張>攻撃
	短絡的	2.62	2.88	3.93	3.32				
対人不安 高群 n=162	アサーティブ	2.80	3.86	2.68	3.33	18.84*	38.28*	26.61*	(H/L) 非主張>間接>アサーティブ,短絡,攻撃
	攻撃的	2.74	2.54	2.13	2.39				(H/H) アサーティブ>非主張,間接,短絡>攻撃
	非主張的	4.08	3.38	3.08	2.93				(L/L) 短絡>非主張,アサーティブ>間接,攻撃
	間接的	3.21	3.34	2.15	2.73				(L/H) アサーティブ,短絡>間接,非主張,攻撃
	短絡的	2.75	3.07	3.77	3.32				
低群 n=155	アサーティブ	2.90	3.75	2.82	3.49	16.40*	63.31*	45.53*	(H/L) 非主張>間接,アサーティブ,攻撃,短絡
	攻撃的	2.58	2.36	1.93	2.07				(H/H) アサーティブ,非主張>間接,短絡>攻撃
	非主張的	4.10	3.63	2.67	2.20				(L/L) 短絡>アサーティブ,非主張,間接>攻撃
	間接的	3.06	2.85	2.24	2.49				(L/H) アサーティブ,短絡,非主張,間接,攻撃
	短絡的	2.57	2.83	4.02	3.47				
公的自意識 高群 n=169	アサーティブ	2.74	3.86	2.62	3.17	25.08*	46.75*	30.74*	(H/L) 非主張>間接>アサーティブ,短絡,攻撃
	攻撃的	2.67	2.56	2.01	2.17				(H/H) アサーティブ>非主張,間接,短絡,攻撃
	非主張的	4.18	3.40	3.13	2.74				(L/L) 短絡>非主張>アサーティブ>間接,攻撃
	間接的	3.22	3.18	2.08	2.46				(L/H) 短絡,アサーティブ>非主張,間接,攻撃
	短絡的	2.68	2.88	3.81	3.17				
低群 n=168	アサーティブ	2.84	3.73	2.67	3.22	25.41*	33.01*	28.34*	(H/L) 非主張>間接,アサーティブ,攻撃,短絡
	攻撃的	2.75	2.83	2.08	2.35				(H/H) アサーティブ,非主張,短絡,間接,攻撃
	非主張的	4.00	3.38	2.77	2.18				(L/L) 短絡>非主張,アサーティブ,間接>攻撃
	間接的	3.01	2.83	2.39	2.41				(L/H) 短絡,アサーティブ>間接,攻撃,非主張
	短絡的	2.76	3.04	3.75	3.55				
共感性 高群 n=142	アサーティブ	2.86	3.86	2.68	3.44	30.48*	86.02*	39.00*	(H/L) 非主張>間接,アサーティブ,短絡,攻撃
	攻撃的	2.57	2.33	1.77	1.97				(H/H) アサーティブ,非主張,間接>短絡>攻撃
	非主張的	3.96	3.11	2.81	2.43				(L/L) 短絡>非主張>アサーティブ>間接,攻撃
	間接的	3.15	3.30	1.93	2.51				(L/H) アサーティブ,短絡>非主張,間接>攻撃
	短絡的	2.60	2.87	3.83	3.17				
低群 n=150	アサーティブ	2.77	3.81	2.86	3.27	15.34*	31.65*	31.41*	(H/L) 非主張>間接,攻撃,アサーティブ,短絡
	攻撃的	2.78	2.78	2.30	2.42				(H/H) アサーティブ>短絡,非主張,間接,攻撃
	非主張的	4.12	3.52	3.18	2.67				(L/L) 短絡>アサーティブ,非主張>間接,攻撃
	間接的	3.13	2.96	2.36	2.52				(L/H) 短絡,アサーティブ>間接,非主張,攻撃
	短絡的	2.71	3.09	3.78	3.56				

* $p < .001$

好しにくい行動形態としているものの、高群が積極的に「攻撃的」を選好するわけではなかった。これにより、攻撃性の高い者は異なる場面を通じて一貫

して「攻撃的」を選好しやすいとは言えず、今回の結果では「攻撃的」は攻撃性の高低に関わらず選好されにくいことが示された。

2) 対人不安

対人不安の高い者（高群）と低い者（低群）を抽出したところ、高群では得点が35点～74点の範囲（ $n=162$, 平均値=39.86, $SD=4.8$ ）で、低群では0点～23点の範囲（ $n=155$, 得点平均値=16.37, $SD=5.55$ ）であった。単純主効果検定を行ったところ、高低群における選好の仕方に違いがみられた。

場面別の「非主張的」の選好平均値をみたところ、[H/L]と[H/H]では低群の得点が高群より高く、[L/L]と[L/H]では高群の得点が低群より高かった。これにより、対人不安が低い者は親密度の高い場面で「非主張的」を選好するが、対人不安の高い者は親密度の低い場面での「非主張的」の選好が高まることが示された。これに関して、親しくない他者には「非主張的」の選好が顕著になりやすいとしたEisler et al. (1975)の指摘は、対人不安の高い者の傾向とも関係していることが推察された。

3) 公的自意識

公的自意識の高い者（高群）と低い者（低群）を抽出したところ、高群では得点が44点～55点の範囲（ $n=169$, 平均値=47.31, $SD=2.57$ ）で、低群では0点～34点の範囲（ $n=168$, 平均値=27.06, $SD=8.46$ ）であった。単純主効果検定を行ったところ、高低群における選好の仕方に違いがみられた。

まず、場面ごとに選好されやすい行動形態をみたところ、[H/H]について、高群では「アサーティブ」が最も選好しやすいとしているのに対し、低群では行動形態間での違いが認められず、両者に違いが生じた。アサーションと公的自意識との関係を検討した研究は少ないが、本研究の結果から公的自意識の高低による違いが親密度も主張の必要性も共に高い場面で顕著になることが明らかとなった。

さらに、公的自意識の高い者に特徴的な自らの容姿やしぐさなどの外的側面への意識や他者からの評価に対する敏感さといった性格特性が、「アサーティブ」という行動の選好につながるとした結果は、公的自意識が及ぼす行動面への影響を理解する上での一助となる可能性が考えられた。

4) 共感性

共感性の高い者（高群）と低い者（低群）を抽出したところ、高群では得点が42点～50点の範囲（ $n=142$, 平均値=45.19, $SD=1.85$ ）で、低群では0点～34点の範囲（ $n=150$, 平均値=27.12, $SD=8.13$ ）であった。単純主効果検定を行ったところ、高低群における選好の仕方に違いがみられた。

まず、場面ごとに選好されやすい行動形態をみたところ、[H/H]について、高群では最も選好しやすい行動形態が「アサーティブ」、「非主張的」、「間接的」としているのに対し、低群は「アサーティブ」のみを選好しやすい行動形態としており、両者に違いが生じた。また、[H/H][L/H]について、高群では「攻撃的」を最も選好しないとしているのに対し、低群では他の行動形態との差がみられなかった。

さらに、一般的に共感性が高い者は援助行動を示しやすく、「アサーティブ」の選好が高くなると予測された。しかしながら、4場面を通じて、共感性の高さによる「アサーティブ」の高い選好は認められなかった。

これらの結果により、共感性の高さが「アサーティブ」の選好を促進するとはいえないが、「攻撃的」の選好を抑制する可能性が示唆された。

3. まとめ

行動形態については、これまでもアサーション・トレーニングなどの実践活動の中で用いられることが多く、個人の習慣化された「攻撃的」「非主張的」な自己表現を意識し、「アサーティブ」に変える訓練が導入されてきた。ただし、用いられる行動形態は、実践家の経験則に基づくものが多く、実証的な検証はほとんど行われていなかった。また、個人要因と状況要因といった規定因から、行動形態の選好の違いを捉える視点は、自己表現における新たな一側面を示したと考えられる。

しかし、自己表現を行動形態で捉えることについては、いくつかの問題点が挙げられる。まず、表現方法としての「アサーティブ」を設定すること自体が、相互尊重を基本理念とする適切な自己表現から逸れる危険性を孕んでいる。つまり、他者に配慮し

た姿勢を含めながら状況に対して積極的に働きかける自己表現は、「アサーティブ」としての行動形態に則ったものであったとしても、必ずしも「自己も他者も大切にしたい適切な自己表現」と断言することはできない。これに関しては、沢崎 (1999)²⁸⁾や沢崎 (2001)²⁷⁾でも危惧するところであるが、行動形態という枠組みで自己表現を捉えることは、友好的な感情や愛情、互いの人権尊重の気持ちに伴わない技術先行型の自己表現になりやすいのである。これに関して本研究の結果でも、共感性の高さは援助行動や思いやりに関わる要因であり「アサーティブ」との強い関連が予想されたものの、両者の間に想定された関係が認められなかった。このことから、本研究で用いた「アサーティブ」は上記の技術先行型の自己表現であり、従来の自他尊重に基づく適切な自己表現とは異なるものであったと考えられる。

それでは、一般的にも適切な自己表現であるアサーティブとはいかなる自己表現であるか。これに関して、三田村・松見 (2010)²³⁾は、話し手の問題が解決されるような自己表現が適切であり、様々な場面で柔軟に自己表現が行えることの重要性を論じている。これは、話し手が設定する目標やその時の状況要因に基づき判断されるものであり、表現方法に帰属されるものではない。したがって、適切な自己表現について、表現方法としての行動形態の1つとして位置づけることは不可能であり、かつ、行動の適切さと行動形態は同時に備えることができず別物であろう。

最後に、これまで多くの研究者や実践家が、アサーションに関連する個人差や状況について論じてきた。本研究では、その関連について個人と状況を同時に扱い、ほんの一端ではあるが、実証的な説明を示したものと見える。しかしながら、行動形態を用いた今回の検討はアサーション概念の定義に関わる部分で問題があったと考える。それは、適切な自己表現とは多種多様な場面を通じて常に同じ表現方法というわけではなく、行動形態という枠に縛られるものではないということである。また、行動の適切さについては、今後さらなる検討が必要と考えられる。

引用文献

- 1) Alberti, R. E. & Emmons, M. L., 2001. *Your perfect right : Assertiveness and equality in your life and relationships*. 8th ed. Atascadero, CA : Impact.
- 2) Alden, L. & Cappe, R. 1981. Nonassertiveness : Skill deficit or selective self-evaluation? *Behavior Therapy*, 12, 107-114.
- 3) 安藤明人・曾我祥子・山崎勝之・島井哲志・嶋田洋徳・宇津木成介・大芦 治・坂井明子, 1999. 日本版 Buss-Perry 攻撃性質問紙 (BAQ) の作成と妥当性, 信頼性の検討 *心理学研究*, 70, 384-392.
- 4) 安藤有美, 2009. 大学生における自己表現スタイルと場面特性との関連 *カウンセリング研究*, 42, 50-59.
- 5) Broverman, I.K., Broverman, D. M., Clarkson, F. E., Rosenkrantz, P. S., & Vogel, S. R., 1970. Sex-role stereotypes and clinical judgments of mental health. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, 34, 1-7.
- 6) DeGiovanni, I. S. & Epstein, N., 1978. Unbinding assertion and aggression in research and clinical practice. *Behavior Modification*, 2, 173-192.
- 7) Deluty, R. H., 1979. Children's Action Tendency Scale : A self-report measure of aggressiveness, assertiveness, and submissiveness in children. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, 47, 1061-1071.
- 8) Deluty, R. H., 1981. Adaptiveness of aggressive, assertive, and submissive behavior for children *Journal of Clinical Child Psychology*, 10, 155-158.
- 9) Deluty, R. H., 1981. Alternative-thinking ability of aggressive, assertive, and submissive children. *Cognitive Therapy and Research*, 5, 309-312.
- 10) Deluty, R. H., 1985. Consistency of assertive, aggressive, and submissive behavior for children. *Journal of Personality and Social Psychology*, 49, 1054-1065.
- 11) Eisler, R. M., Hersen, M., Miller, P. M. & Blanchard, E. B., 1975. Situational determinants of assertive behaviors. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, 43, 330-340.
- 12) Epstein, N., 1980. Social consequences of assertion, aggression, passive aggression, and submission : Situational and dispositional determinants. *Behavior Therapy*, 11, 662-669.
- 13) Galassi, J. P. & Galassi, M. D., 1975. Relationship between assertiveness and aggressiveness. *Psychological Reports*, 36, 352-354.
- 14) Galassi, M. D. & Galassi, J. P., 1978. *Assertion : A*

- critical review. *Psychotherapy: Theory, Research and Practice*, 15, 16-29.
- 15) 平木典子, 1993. アサーション・トレーニングさわやかな〈自己主張〉のためにー 日本・精神技術研究所
 - 16) Hollandsworth, J. G., 1976. Further investigation of the relationship between expressed social fear and assertiveness. *Behaviour Research and Therapy*, 14, 85-87.
 - 17) 堀井俊章・小川捷之, 1996. 対人恐怖心性尺度の作成 上智大学心理学年報, 20, 55-65.
 - 18) 堀井俊章・小川捷之, 1997. 対人恐怖心性尺度の作成 (続報) 上智大学心理学年報, 21, 43-51.
 - 19) 加藤隆勝・高木秀明, 1980. 青年期における情動共感性の特質 筑波大学心理学研究, 2, 33-42.
 - 20) Lee, D. Y., Hallberg, E. T., Slemmon, A. G., & Haase, R. F., 1985. An Assertiveness scale for adolescents (ASA). *Journal of Clinical Psychology*, 41, 51-57.
 - 21) Levin, R. B. & Gross, A. L., 1984. Reactions to assertive versus nonassertive behavior. *Behavior Modification*, 8, 581-592.
 - 22) LoPresto, C. T. & Deluty, R. H., 1987. Consistency of aggressive, assertive, and submissive behavior in male adolescents. *The Journal of Social Psychology*, 128, 619-632.
 - 23) 三田村仰・松見淳子, 2010. 相互作用としての機能的アサーション パーソナリティ研究, 18, 220-232.
 - 24) Morgan, W. G., 1974. The relationship between expressed social fears and assertiveness and its treatment implications. *Behaviour Research and Therapy*, 12, 255-257.
 - 25) Orenstein, H., Orenstein, E., & Carr, J. E., 1975. Assertiveness and anxiety: A correlational study. *Journal of Behavior Therapy and Experimental Psychiatry*, 6, 203-207.
 - 26) Phelps, S. & Austin, N., 1981. *The assertive woman*. 12th ed. Atascadero, CA: Impact.
 - 27) 沢崎達夫, 2001. 上手に意見や気持ちを伝えるスキル アサーションの基本技法 (特集自分を表現できる子できない子), 児童心理, 55, 47-52.
 - 28) 沢崎俊之, 1999. 自分も相手も尊重するコミュニケーションアサーショントレーニングの活用 (特集人の気持ちがわかる子), 児童心理, 53, 1202-1206.
 - 29) 塩見邦雄・庄田明子, 2004. 児童のアサーションと学校ストレスの関係についての研究ー新しい「児童版アサーション測定尺度」を用いてー 兵庫教育大学研究紀要, 24, 59-73.
 - 30) 菅原健介, 1984. 自意識尺度 (self-consciousness scale) 日本語版作成の試み, 心理学研究, 55, 184-188.
 - 31) 高井次郎, 2002. 依頼および断りの状況における直接的・間接的対人的方略の地域比較, 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要 (心理発達科学), 49, 181-190.
 - 32) 玉瀬耕治・越智敏洋・才能千景・石川昌代, 2001. 青年用アサーション尺度の作成と信頼性および妥当性の検討, 奈良教育大学紀要 人文・社会科学, 50, 221-232.
 - 33) 玉瀬耕治・馬場弘美, 2003. アサーションに及ぼす場の認知の影響に関する研究, 教育実践総合センター研究紀要 (奈良教育大学教育学部附属教育実践総合センター), 12, 43-50.
 - 34) Wolpe, J. & Lazarus, A. A., 1966. *Behavior therapy techniques: A guide to the treatment of neuroses*. NY: Pergamon Press.

(安藤有美：全学共通教育センター)

場面1〔友人からの誘い場面：H/L〕

友人から今度の休みにどこかに遊びに行こうと誘われました。その友人とは前々からどこかに遊びに行こうと約束してはいましたが、近頃忙しかったので、今度の休みは家でゆっくりしようと決めていました

- ①いいよ。どこ行く？（非主張的）
- ②ごめん、また今度ね。（短絡的）
- ③今度の休みは難しいかもしれないな。考えておくよ。（間接的）
- ④最近ずっと忙しくて、休みは家でゆっくりしようと思ってたんだ。遊びに行くのは今度にしない？（アサーティブ）
- ⑤今度の休みはだめだなー。（攻撃的）

場面2〔雑談場面：H/H〕

あなたは友人とレストランで食事をしていました。友人との話は尽きることなく、この続きをあなたの下宿先で話そう、と友人は言いました。しかし、明日は早い時間から用事もあり、あなたは家に来てほしくないと思っています。

- ①話の続きはまた今度ね！（短絡的）
- ②少しぐらいだったらいいよ。（非主張的）
- ③家の中がすごく散らかってるんだよなー。（間接的）
- ④ごめん。明日の朝早くから用事があるから、次の機会にゆっくり話そう。（アサーティブ）
- ⑤今日は早く寝たいから無理！（攻撃的）

場面3〔グループ作業場面：L/L〕

授業で出題されたグループ課題において、あなたは多くの資料を集めたりと、自分なりに一生懸命だったので、あなたの働きはグループに貢献していると考えていました。しかし、ある時、グループのメンバーからあなたは非協力的だと言われました

- ①えー！ちゃんとやってるよ。（短絡的）
- ②私（俺）のどこが非協力的だって思うの？自分なりに頑張ったつもりだけど、何が足りなかったのか教えてよ。（アサーティブ）
- ③ごめん。これからはもっと頑張るよ。（非主張的）
- ④そういう自分は何をしたって言える？（間接的）
- ⑤それじゃあ後は自分たちでやれば！（攻撃的）

場面4〔金銭貸借場面：L/H〕

あなたは以前、友人にお金を貸していて、そのお金はまだ返してもらってはいません。友人はそのことをすっかり忘れてしまっている様子で、何気なくそのことを話題にしても、一向にお金を返してくれる素振りもありません

- ①そろそろ貸したお金、返して。（短絡的）
- ②何か忘れてない？こないだお金貸したよね？（間接的）
- ③いい加減、貸してたお金返してよ！（攻撃的）
- ④あの…お金…（非主張的）
- ⑤こないだお金借りたこと覚えてる？今でも返せるようなら、返してほしいんだ。（アサーティブ）

抄 録

本研究は、大学生が友人との対話場面でやっている自己表現について、個人要因と状況要因による影響を検討した。自己表現については、場面に対する行動形態（アサーティブ、攻撃的、非主張的、間接的、短絡的）への選択頻度をもって個人の自己表現の選好として捉えた。調査は大学生631名に質問紙を配布し実施した。分散分析の結果、以下の3点が明らかになった。第1に、自己表現の選好は状況要因による影響を受けること。第2に、自己表現の選好は個人要因による影響を受けること。第3に、自己表現の選好は、個人要因と状況要因の交互作用を受けて表出されること。以上より、自己表現は状況による強い影響を受けつつも、個人差の影響を受けて異なる傾向を示すことが明らかとなった。

キーワード：自己表現，アサーティブ，攻撃的，個人要因，状況要因，大学生